

言葉

窯めぐり

まちかど特派員
のページ



原稿執筆者
まちかど特派員
こたに 小谷 柳太

信楽に生まれて60年になります。注目の「団塊の世代」は戦後日本の大変貌を見てきたと実感します。

子どものころは何もかもが人力頼りでした。小学生の頃、さみだれの中、母は田植えをしていました。中学生時代、重たい石油発動機を父と一緒に田に運んだことを思い出します。農業だけではなく、日本のあらゆる産業が「近代化」というスローガンでせわしく変貌しました。信楽の陶業界も同様に、信楽を訪れる多くの人の期待に反して「登り窯」は雨ざらしとなっています。信楽に残る「近代化遺産」(?)を振り返ってみました。

窯時代の長いこと、長いこと。

信楽焼は奈良時代、紫香楽宮跡の蔓(瓦葺きの屋根瓦)を焼いたのが始まりとする説があります。しかし、その瓦窯を発見したという情報に接したことはありません。

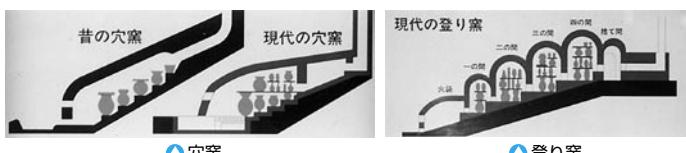
そうではなくて、信楽焼は鎌倉時代に発祥したのではないかと密かに考えています。「弘安4年」と銘記された壺もあるそうで、水甕、種壺、茶壺、擂鉢、食器、神器などを焼いてきた信楽焼にはむしろ似つかわしい。

これらの民間の日常雑器を提供してきたのが穴窯です。原理は簡単。斜面に開削トンネルを掘り、手前からひたすら燃やします。中止ですが、それでも、この穴窯も

ついでながら、「陶器」に先立つ「須恵器」の本場・かつての陶村を中心に関東南に無数に残る窯跡もみな穴窯です。それに先立つ「土器」は皆、「野焼き」：日本人は窯を築くことを知らなかつたようです。

なお、ついでに、「古信楽」とは穴窯を使った信楽焼のことで、登り窯で焼いた壺は、この範疇に入りません。

登窯



左上:穴窯…これは県立陶芸の森に復元された戦国時代の双胴の穴窯(金山遺跡で発掘)

左:登り窯…歴史的役割を終えた裸の登り窯ですが、なぜか観光客はこれを見て喜ぶ(この上にトタン葺きの陶屋=スヤがあった)

上:ガス窯…高さ2m、超ノッポ作品の窯詰め風景(県立陶芸の森の5.2立米窯)

ありました。
最下部の「火袋」から火を入れ、練り焚きで窯全体を加温します。

こうすることで窯の中の製品生地が全体に炙られ、乾燥が進んだ生地は加熱に適していく製品の完成率も向上します。リスク(破損)は回避されコスト(燃料)も縮減されます。間にはそれぞれ表と裏に

焚き口があり、内部の温度は1,300度弱になりました。焚きあがる毎に上へ上へと登つていきます。不眠不休で一週間以上に亘って焚き続けます。これも皆、人力。手間を惜しんでいる場合ではありません。手を抜けば焼成室の温度はアツという間に下がります。昭和30年代の初めまで、

全国シェア90%以上を占めた信楽火鉢はこうして焼かれました。大型の登り窯が築かれたのは窯が半地下式なのに対して登り窯は地上式です。築窯技術、特に屋根部分の工法が向上したことでも寄与しました。

今、信楽のほとんどの窯がガス品の大型化が進んだからです。穴窯が半地下式なのに対して登り窯は地上式です。築窯技術、特に屋根の煙突ではありません。銀色に輝くガス窯はおしゃれですし、製品は棚板上で組み上げられ台車に乗せて中に運び込まれます。

小振りで数も少ない品物なら電気窯で十分です。ガスも電気も自宅でコンピュータ・モニターを見ながら温度管理できます。土も釉薬も、窯さえも、信楽以外の土地で買える時代になりました。TVで見ましたが、まるで電子レンジのような窯も発売されています。

定年サラリーマンもその奥方も陶芸習得が憧れだそうです。

重油窯を円形エンドレスにした「トンネル窯」で建築タイルなどを大量に焼成、出荷する企業も出現しました。「協業化」による工場化時代もありました。しかし景気の良い話はあまり聞きません。

信楽といえば「たぬき」でしょうが、信楽の窯業関係者の中には狸をあまり好まない風潮があります。「信楽はそれだけではないんだエ」ということだそうです。それはそうですが、今年は「しがらき狸・百年」だそうです。火鉢→植木鉢→傘立→タイルとアイテムは時代とともに変化しましたが、百年間コンスタントに売れているのもまたタヌキの置物だといふ事実には考えさせられます。

12もの「間」を備えた登り窯も